

SNS上の情報はすべてフェイク

「フェイクニュース」は、アメリカのトランプ大統領が自身に対して批判的なメディアなどに対して頻繁に使ったことから話題になりました。日本では、災害時などに人々の不安を煽るようなデマ情報に対して使うこともあります。一般には「嘘ニュース」と解されていますが、私は、「フェイクニュース」は決して「嘘ニュース」ではないと思っています。そのことは、メディア論から考えるとわかりやすくなります。カナダ出身の文明批評家マクルーハンは、メディアには大きな枠組みがあり、それは太古の昔から現在まで、何回か変移していると述べています。最初の枠組みは、声です。直接的なやりとり以外にメディアがなかったわけです。その後、文字が発明され、メディアの枠組みは手書きの文字となります。15世紀になり、グーテンベルグが活版印刷を発明すると、メディアの枠組みは活字になります。印刷物のこ

とです。そして、このあとにくる枠組みが、私はマスメディアだと思っています。19世紀半ば以降から2011年まで、マスメディアと接することがすなわち情報を得ることであったわけです。なぜ2011年かについては、ここでは詳述を控えますが、その年以降、実質的にマスメディアは主導権を失い、現在はインターネットがメディアの枠組みとして完全に確立されています。さて、わずか8年前まではメディアの枠組みであったマスメディアにおいては、情報の価値とは正しさ、つまり「真実性」(トゥルース)でした。プロの記者やディレクターが複数のソースから情報の裏をとり、いわゆるガセネタを排除することで情報の正しさ＝真実性を担保していたのです。そこで、正しいということがニュースバリューとなり、これが大衆(マス)に流されるわけです。誤報をしてしまった場合などは可及的速やかに訂正がなされま

News & Opinion

「フェイクニュース」とは「嘘ニュース」のことではない

メディアから発信される情報について、「フェイクニュース」や「ポストトゥルース」という言い方をすることがあります。一般には、「嘘ニュース」、「真実でないこと」という意味で捉えられていますが、そういう捉え方では、現代の情報社会の状況は把握できないといいます。



メディアを信頼していました。ところが、インターネット上のSNSで情報が流通するようになると、その情報が複数のソースから裏をとったもの、ということとは、まずありません。基本的には、嘘か本当かわからないということが、デファクトスタンダード(事実上の標準)になっています。例えば、SNS上ではリツイートという形で情報が拡散しますが、拡散している人たちがこれを嘘だと思っているかという、決してそうではなく、「事実かもしれない」と思っていると思います。つまり、自分が主張している、ある



大黒 岳彦 Takehiko Daikoku

明治大学 情報コミュニケーション学部 教授
【研究分野】研究分野哲学、情報社会論(メディア、情報社会の哲学的思想的研究)
【研究テーマ】身体メディア論、電子メディア論を軸とした「メディアの基礎理論」の構築
【主な著書・論文】
『ヴァーチャル社会の(哲学)ービットコイン・VR・ポスト・トゥルース』(青土社・2018年)
『情報社会の(哲学)ーグーグル・ビッグデータ・人工知能』(勤草書房・2016年)
『「情報社会」とは何か?ー(メディア)論への前哨』(NTT出版・2010年)
『謎としての「現代」ー情報社会時代の哲学入門』(春秋社・2007年)
『<メディア>の哲学ールーマン社会システム論の射程と限界』(NTT出版・2006年)

いは、発信している意見の真実性をながしか信じた上でアップロードしているわけです。マスメディアの論理でいえば、このような形で飛び交っているSNSの情報は、当然、すべて「嘘ニュース」ということになります。ところが、このマスメディアは、インターネットによって、すでに枠組みから降ろされたメディアです。つまり、「嘘ニュース」というのは、現代のメディアを前代のメディアの価値観で捉えている言い方というわけです。それでは、現状を正しく把握することは難しいでしょう。基本的に、SNSというインターネットをメディアとする情報の質というものは、すべてフェイクであり、このインターネットの枠組みの体制を、「ポストトゥルース」(「真実」以降、もしくは、次なる「真実」というのだと、私は考えています。

インターネットの世界ではすべての価値が相対化される

では、インターネット上における情報のニュースバリューとはどこにある

のか。それは、端的に言えば、「数」です。例えば、「いいね」の数であったり、PVの数です。数が正当化の根拠になっています。その背景には、発言できるのは知識と教養のある人に限られていたマスメディアの時代に対し、インターネットの現代は、誰でもなんでも発言できるようになったことがあります。それは、意見の発表という観点からいえば、民主化です。例えば、インターネットの初期には、ネット社会は万人が意見を発信でき、世界の全ての人が繋がるという未来像が描かれました。しかし、現実には、玉石混濁の情報氾濫の中で、人は自分と似た意見の周辺に閉じこもるようになっていきます。そこは、極めて排他的なかつば社会で、そこでは、マスメディア時代の「正しさ」は重要ではありません。さらに、誰もが対等に発言できる世界では、全ての価値が相対化されます。例えば、アインシュタインの相対性理論を理解するには長期の研鑽が必要で、そこに達する者は少数です。その少数が権威をもつのがアカデミ

チェーンによるマイニングです。その構造が、実は重要なのです。簡単に言うと、ビットコインは、ビットコインのシステム全体の監視と承認を司る、PoW（プルーフオブワーク）というコンピュータの「労働」を価値とみなしているのです。実は、ここでは大量の電力が消費され、環境問題が課題となつていますが、労働が根底にないと価値は発生しないことを、ビットコインは証明したと思っています。

これは、経済的な価値の問題ですが、それにとどまらず、一般に「価値」というものが、フラットなインターネット社会の中で、どう創出されるのか。それが数によるものではないことを考えていくことは、非常に重要なことだと考えています。例えば、アカデミズムにしろ、伝統芸能にしろ、その権威を成立させるためには長期の研鑽という



ムです。

しかし、そんな研究者の意見も、小学生の意見も、SNS上ではひとつの意見としては対等です。SNS上では、全てが相対化され権威が無化されるのです。むしろ、小学生の意見に「いいね」が多いかもしれません。理解しやすいのですから。これも民主化の一面といえるでしょう。しかし、当然、相対性理論の価値は「いいね」の数で評価されるものではありません。現代のさまざまな技術を成り立たせている基盤になっているのが、相対性理論や量子力学です。これを理解する少数の権威やヒエラルキーを、つまりはアカデミズムをフラットにする世界で、はたして科学の発展が期待できるのか、疑問です。

新たな構造を描くためのヒントがビットコインにある

もちろん、アカデミズムやジャーナリズムに絶大な権威が無条件に認められていた時代に戻るべきだ、と言っているわけではありません。しかし、イ

面倒な手続きが必要です。が、インターネット社会では検索という簡単な方法で膨大な知識が得られます。すると、長期の研鑽という「労働」よりも、簡単に得られる膨大な知識という「数」に価値を感じがちになりますが、その膨大な知識は、情報の断片であり、そのままでは瑣末な知識に過ぎないので、重要なのは、その瑣末な知識をど

ンターネット社会が良い状況にある、とはいえないのは確かです。インターネットがメディアの枠組みとして確立し始めた2011年からまだ8年で、現在は過渡期といえます。今後、インターネット社会はどのような構成が可能なのか、少なくとも、新たな構造のビジョンを描くことは必要で、それは、哲学が取り組むべき課題ではないかと考えています。例えば、価値というものをどう捉えるか、ということですが、現在は、数をアフィリエイトの仕組みで経済的な価値に連動させています。しかし、先に述べたように、数による価値構造は極めて不健全な体制だと思つていきます。それに対して、良いヒントがビットコインの仕組みにあります。仮想通貨という点、一般には、既存の貨幣との相場ばかりが目されますが、重要なのは、仮想通貨がそもそもなぜ価値を持っているのか、ということなのです。本来は玩具のお札と同じで現実社会では価値を持たないはずのビットコインに、どこから価値が生まれているのかといえば、ブロック

う編成していくかという大局的スキルです。そのスキルを高めるために、長期の研鑽も必要なのです。

インターネット社会の新たなビジョンを描くことは、哲学の課題と述べましたが、一方で、一般の生活者の皆さんや、さらに学生たちは、インターネットやツイッターの断片的な情報に満足するのではなく、それらを結びつけてひとつの像を浮かび上がらせるための、幅広いだけでなく有機的な知識と教養を身につけることを意識してほしいと思います。実は、伝統や権威を重んじる意識の強いヨーロッパでは、それらを相対化させるインターネット社会を警戒する傾向があります。それに対して、権威の相対化や数の価値観が顕著に現れているのが日本とアメリカです。安倍首相とトランプ大統領のジャーナリズム軽視の姿勢などは、その象徴といえます。私たち市民が断片的な情報ばかりで物事を判断しては、まさに、為政者の「由らしむべし知らしむべからず」という政策に操られるままになってしまうでしょう。